

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月14日現在

機関番号：17301

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2011～2012

課題番号：23820037

研究課題名（和文）江戸時代文人の詩文に対する意識について—日中・京阪と江戸の比較から—

研究課題名（英文）Edo Bunjin`s Attitude Toward the Act of Composing Poetry

研究代表者

中島 貴奈 (NAKAJIMA TAKANA)

長崎大学・教育学部・准教授

研究者番号：10380809

研究成果の概要（和文）：江戸時代を代表する漢詩人である六如（1724-1801）と中島棕隠（1779-1855）の作品をもとに、彼らが漢詩文を作ること、あるいは文人・詩人としての自己をどのように認識していたのかを考察した。六如や棕隠には詩や文章を作ること、また詩人としての自己に言及する表現が多く見られることを確認し、そこに見られる詩や文章あるいは詩人に対する考え方には、中国とりわけ宋代詩人の影響が認められることを明らかにした。さらにこうした特徴は、同時期の江戸漢詩人と比して顕著であることについておおよその見通しを持つことができた。

研究成果の概要（英文）：Rikunyo(1724-1801) and Nakashima Soin(1799-1855) were Chinese classical poet in the middle to late Edo era. Their poetry contains much argument about poem and writing. It also shows how they recognized their-self as poet.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2011年度	400,000	120,000	520,000
2012年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
年度			
総計	700,000	210,000	910,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：日本文学

キーワード：日本漢文学・日中比較文学・江戸漢詩

1. 研究開始当初の背景

（1）江戸時代特に中期以降の文人たちの詩風詩論や作詩方法について論じた先行研究は少なくないが、彼らが詩や文章を作ること、その意義をどう認識していたかについて考察したものは多くない。

江戸時代漢詩文の大まかな流れとしては、近世初頭の朱子学的文学観の影響を受けた林家の漢詩文から、古代中国の言語と詩に通じることを目的として擬古詩文の制作に努めた古文辞派へという流れを経て、近世中期以降の漢詩人たちは時代に見合った等身大

の作品を作るようになり、漢詩文を作り教授することを本業とするものも現れるに至ったと見なすのが通説である。

では近世中期以降の文人たちは、朱子学的道徳観や古文辞学といったいわば後盾無しに漢詩文を味わい、自らも作ることを手放して容認できたのだろうか。例えば近世後期の漢詩人であり儒者でもあった広瀬淡窓(1782-1856)は、「詩を学ぶのは何か益があるからではなく、その効能を人に説くべきものでもないが…」と前置きした上ではあるが、「詩文を学び作ることによってのみ、情に通じることができるからだ」と述べているが、これは一見したところ、近世初期の伊藤仁斎らの文学観と大差ないようにも思われる。結局のところ近世中期以降の文人たちも、詩文を学び作ることの意義を既存の文学観や価値に求めざるを得なかったのだろうか。この点について考察することは、江戸時代の人々が「文学」そのものをどう捉えていたのかという問題にもつながり、文学史的な意義は大きいと考えた。

(2) 申請者は先に、近世中期の漢詩人六如(1724-1801)の作品中に、自らの詩作行為を客体化して詠ずる表現が多く見られることに着目した。そして中国唐宋詩等との比較も含めて検討を行った結果、そこには中国の詩文の影響のもと「詩人」と詩作対象としての「景」が詠われており、「詩人」である自己は詩を促す「景」に対峙し、わき出る詩情にやむにやまれず、「景」を制御して詩に収めとる存在として描かれていることを明らかにした。

しかしながら六如の詩にはなお中国の詩文には例を見ない表現も見受けられる。そこには江戸時代文人・漢詩人独自の詩や詩人に対する考え方が表れているのではないかと推察できる。こうした研究結果を受け、まずは漢詩の読解が進んでいる六如を中心に、さらに「詩」や「文」に対する意識、加えて詩人としての自己をどのように認識しているかを明らかにしたいと考えた。

ただし、六如のみでは不十分であると考え、六如に才能を認められ、同じく京都を中心に活躍した中島棕隠(1779-1855)の作品も対象とすることにした。

(3) さらに、江戸時代漢詩文に見られる東西すなわち江戸漢詩人と京阪漢詩人の詩風の違いについても、すでに先学の指摘するところとなっている。例えば日野龍夫氏は漢詩

の持つ社会批判性という点に着目し、京阪の漢詩に比して江戸詩人の作品には批判性があまり認められないことを明らかにされている。

こうした先学の指摘を受け、詩や詩文に対する認識にも、東西の違いがあるのではないかと推察した。六如や中島棕隠とほぼ同時期に活躍した江戸の詩人、大窪詩仏や柏木如亭といった詩人の作品を一瞥する限りでは、詩作行為そのものを詠ずる詩は見られるものの、六如や棕隠ほど「作詩」「作文」に対する認識が強く表れている作は少ないように感じられた。そこで、単に中国古典詩文との比較のみでなく、同時代における東西の違いについても考察したいと考えた。

(4) 最後に、江戸漢詩文は、恐らくデータベース化が最も遅れている分野の一つであると考え。汲古書院の『詩集 日本漢詩』をはじめとする影印本により、主立った漢詩人の主要な漢詩文集については比較的容易に読むことはできるが、活字化されているものは僅かであり、データベース化に到ってはそのほんの一部に過ぎない。こうした状況を踏まえ、少しずつでも漢詩文のデータベース化を行う必要があると考え、六如と棕隠の漢詩文の入力を行うこととした。

2. 研究の目的

(1) 本研究の第一の目的は、六如や中島棕隠といった漢詩人たちの作品を手がかりに、江戸時代文人たちの「作詩」「作文」等の文学活動に対する意識のあり方について考察することである。詩や文章を作ることが単なる余技ではなく、だからといって留保無しに認められるものでもなくなった江戸時代中期以降の文人たちはしばしば、詩や文章を作る行為そのものや、その意義について言及している。そこには当然中国における文学観や詩文に対する考え方の影響が見られるはずであるが、江戸文人独自のとらえ方も見て取ることができるはずである。中国文学からの影響について再確認すると同時に、江戸漢詩人の独自性も明らかにしたい。

こうした観点から江戸漢詩を取り上げ、また中国における認識と比較考察する先行研究は見られないため、意義は少なくないと考えている。

(2) もう一つの目的は、漢詩文を作ることに対する意識や、詩人としての自己認識とい

った観点から、江戸の漢詩人と京阪の漢詩人を比較し、相違を明らかにすることである。江戸と京阪の違いについては、漠然ともしくは詩の持つ社会批判性といった限られた側面からのみ論じられてきた。新たな視点から考察を行うことは、先行研究を裏付けるだけでなく、両者の相違を更に明らかにできると考える。

(3) また、江戸漢詩の CD-ROM に未収録の六如の漢詩文や、棕隠の漢詩文を少しでも多くデータ化することも本研究の目的の一つである。とりわけ棕隠の漢詩は影印が出版されていないものもあるため、一部でもデータベース化して公開することができたらと考えている。

3. 研究の方法

(1) まずは六如及び中島棕隠の漢詩を、典拠を明らかにしつつ読解することが基本作業となる。その上で詩文を作ることや文人としての意識が表現されていると思われる詩句を抜き出し、含まれている作品全体を精読する。これらの作業は基本的な工具書を用いるほか、典拠の特定にあたってはインターネットや電子資料の中国古典詩検索を利用して効率性を高めて行い、さらに当時流布していたと思われる和刻本等を参照して確認する作業を行った。明代以降の詩文との比較については十分に検討できたとはいえないが、唐代宋代、もしくはそれ以前の詩文についてはおおよそ比較検討できたと考えている。

(2) 同時並行して、パソコンを用いて六如棕隠の詩文の入力を行い、テキスト化につとめた。漢詩の入力は時間と労力が必要とされる作業であり、校正作業も不可欠である。

(3) 六如・棕隠といった京阪の漢詩人と、江戸漢詩人との比較については、主として先行研究を用いて考察する。前述のとおり江戸と京阪の漢詩の特徴の違いについては既に指摘されているところである、また、同時代江戸を代表する漢詩人である柏木如亭の詩に詩作行為を詠んだ表現が見られることについても、揖斐高氏が指摘し、考察を加えている。こうした先行研究にもとづいて江戸漢詩人の詩作に対する意識を明らかにし、六如・棕隠のそれと比較検討したい。

4. 研究成果

(1) 平成 23 年度はまず、すでに作品の読解を進めていた六如と、六如に才能を認められ詩人を志した中島棕隠 (1779-1855) の漢詩作品を中心に考察を行った。

そして、六如と棕隠が共に多用する「わがともがら」(「吾輩」「我儕」などと表記される) という表現に着目し、中国における用例と比較考察した。その結果、中国の唐詩に見られる「わがともがら」の用例は、多く単に「われわれ」という一人称複数の意で用いられているのに対し、宋代特に陸游の作品においては個人の述懐にも使用されており、そこには例えば世俗と相容れなかったり、自然の景物を前にひときわ情を注いだり、それゆえ天から特別な恵みを付与される詩人また文人としてのあり方が反映されていることを明らかにした。その上で六如・棕隠に見られる用例を検討し、両者の「わがともがら」表現も、ただ単に「われわれ」「わたしたち」を指すのみでなく、「詩人あるいは文人としてのわれわれ」といった特定の使われ方をしている例が見られること、さらにそこには陸游ら宋代詩人の影響が認められることを確認することができた。

以上の成果については、平成 23 年度 9 月に開催された和漢比較文学学会大会において発表を行い、席上多くの意見を賜うことができた。

しかしながら、影響を受けたと考えられる中国の詩人との差異やその独自性、あるいは同時代江戸詩人との比較という点においては検討がまだ十分ではなかったと考えており、論文として発表するには至らなかった。

(2) 24 年度は同時代江戸漢詩人との比較を行った。当初は先行研究を用いる予定であったが、対象が柏木如亭に限定されていたため、その他の大窪詩仏らの作品についてはさらに精読と検討が必要であった。しかし十分な検討にはいたらず、数的調査にとどまってしまったが、量的にはやはり、詩や文章あるいは詩人としての自己に言及する表現は六如・棕隠の方に多く認められた。

また、これは推測の域を出ないが、一読する限りその認識にもやはり東西の差は認められるように感じられた。今後は更に内容面の違いについて考察を深めたい。

(3) 漢詩データベースについては、残念ながら公開まで到らなかった。棕隠の漢詩については入力作業を継続中である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計 1 件)

① 中島貴奈

「六如・棕隠の「わがともがら」意識について—宋詩との関わりを中心に—」和漢比較文学会第 30 回大会, 2011 年 9 月 24 日、於筑波大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中島貴奈 (NAKAJIMA TAKANA)
長崎大学・教育学部・准教授
研究者番号：10380809

: